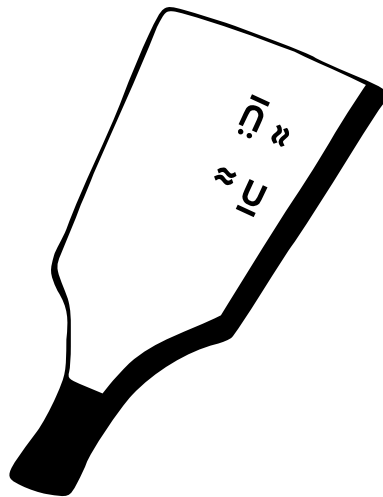
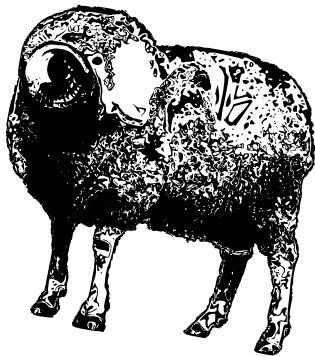


odai

magazine

vol.5



■えいがのこと『白夜のタンゴ』 Mitsommernachtstango

映画館に足を運ぶようになった今日この頃。「フランシス・ハ」の時の予告でカウリスマキの新作と勘違いして再び渋谷の街へ。ここ数年、渋谷に来るたびにこんな街だったかなと思う。

アルゼンチンといえばタンゴと言うくらい、人はタンゴはアルゼンチンのものだと思われているんじゃないだろうか。この映画はタンゴの発祥はフィンランドという話からアルゼンチンのマエストロがわざわざフィンランドに行つて確かめてくるというもの。

ロシアのマイナーとドイツのマーチが合わさつてできたというのは納得した。アルゼンチンタンゴと言うように、実は○○タンゴというのがたくさんある。タンゴは雑多だ。あまり触れたことがないからタンゴと聞くたびに「黒猫のタンゴ」を思い浮かべてしまうけど、演奏も踊り方も国で違つていて勝手に想像していた音楽とは違うということがわかった。

素敵なタンゴのレコードをたくさん集めて聴きたいと思つたから店にターンテーブルを置くまでは早かつたけど、金が尽きてレコードは買えていない。

■ぶらり。

杉浦俊介

先日、何かの用があつて北千住に行つてきた。大した用でもないから忘れてしまつたが、この日は車を駅の向こう側に停めた。駅の向こう側というのは電機大学や足立学園がある側のこと、もう何百回も行つているだろう北千住でも違つた町に見えて面白い。ラーメンを食べた後に古本屋にでも行くかと思つたらブックオフくらいしか思い浮かばなくて行つてみた。駅の逆側につながる半地下通路は昔からあつたんだと思うけど、たぶん初めて通つた。こんな感じで、人は普段行き慣れた町も毎回同じルートを通るだけだったりでその一側面しか見ていないかもしれないなあと思つた。もっと色々散歩して知らない風景をもっと見ておきたい。

タンゴもいいし、フィンランドもやっぱりいいなと思える映画だつた。でも南米のバリ、プエノスアイレスも行きたいなあ。

冒頭で「タンゴがフィンランドのもの？ サウナをあげたんだからタンゴはうちのものよ」みたいな一節があつて、その国の文化と思つていても実は別の国からくることが多いのかなと思つた。

しかし、行く映画館というところとユーロスペースが早稲田松竹くらいだろうか。次はどこか他の土地に、岩波ホールあたり。いや、神保町もよく行っているからなあ。



『白夜のタンゴ』 Mitsommernachtstango

'13 ドイツ・フィンランド・アルゼンチン

監督・脚本 ヴィヴィアン・ブルーメンシェイン

ブックオフでは何か画集というか、そういう本が欲しいと思つていただけ、昔はもう少し種類があつたように思えた棚も漫画に替わっていたような気がした。気のせいかもしれない。ただ、中古DVDで「海を飛ぶ夢」という好きな映画が990円だつた。買つておいてもよかったかもしれない。

■おだいのわたし

(4)

いつか王子駅で2

中村安伸

荒川区尾久あたりと思われる、都電沿いの町を舞台とした小説『いつか王子駅で』（堀江敏幸著）は、競馬雑誌に連載されていたためか、馬のイメージが通奏低音となつてゐる。それはときに競走馬を離れ、モンゴルの草原を駆ける『スーホの白い馬』や、テントの裏につながれた安岡章太郎の『サアカスの馬』などへと飛び火する。

この作品を「ドラマチックな出来事が何ひとつ起こらない、平穩な日常を描いただけの小説」と受け取る人もあるだろう。たしかに表面的にみれば、物語中の出来事はどれも日常の些事の範疇に収まるようなことばかりであるともいえる。その一方で作者の記憶に刻まれた名馬や名レース、文学作品からの引用やその批評など、一見、物語の筋からはみ出たような叙述に、かなりの紙幅が割かれている。

この小説を読むとき、主人公が脳内で経験するイメージそのものが文章を通して読者の脳内に共鳴する。それによって読者は、巧みに構成されたイメージの交響楽を体験することになる。さまざまなイメージをもたらずものは、外面的な出来事であるとともに内面の出来事である。

一人称でつづられたこの小説の語り手は、作者と同一視したくなる人物である。この主人公が古道具屋の自転車乗り回したり、あらかわ遊

■足立区小台とはとくに関わりのない一月の俳句

ほんのりとほのや元日なりにけり

「ほんのりと」と「ほの」は音韻にリフレインの趣があり、意味するところも「ほのかでかすかな様子」と、ほぼ同じである。このような繰り返しで十七音という空間をゆつたりと使うことにより、元日の気分によりよそつてゐる。

岩波文庫版の復本 一郎による注に「ほんのりと」という形容は夜が少しづつ明ける状況を指すと説明されている。すると「明ける」という語が省略されていることになるだろう。

たとえば句の後半部を「元日明けにけり」とすることで「明ける」の

園の観覧車から隅田川の水面を眺めたりといった外面の出来事が描かれる一方で、事故死した競争馬テンポイントを回想したり『あらくれ』のお鳥のことをあれこれ論じたりという内面の出来事も、同じくらしいの重要性をもつて描かれる。もちろん、外面が内面を喚起することもあるし、外面と内面がシンクロする瞬間も多々ある。

この小説における外面の世界を支配するのは、都電、モノレール、バス、自動車、自転車、観覧車、陸上競技といった、移動の手段（人の肉体を含む）であり、内面の世界を支配するのが馬である。そう考えると、この小説の主題が見えてくる気がする。ただし、ここで言う「主題」は国語テストの設問にある「作者が言いたかったこと」というようなものではなく、音楽における「主題」に近いものだと思う。

物語の終盤、主人公の家庭教師先の女子中学生が出場する短距離走の場面が、記憶のなかの名レースのクライマックスのイメージと重なりあう。阪神競馬場でテスコガビーに声援を送った過去の時間と、「咲ちゃん」を必死に応援する作中の現在とがなみぜとなり、すべてのイメージが最大音量で主題を歌い上げ、読者に強烈なカタルシスを経験させる。

ホールの残響のような心地良い読後感。これこそが上質の小説を読むことの醍醐味であろう。

語を使うことも可能だが、そうしなかったのは、「明ける」のきつぱりとした指示性が句の空気を支配し、ひとつの方向へと縛り付けることを避けたのだろう。この句には具体物がなにひとつ存在せず、たゆたうようなリズムとかすかな気配のみが存在している。

※作者は上島鬼貫（1966年5月2日―1973年9月15日）

■年末年始は奈良に帰省いたしました。元日から雪が降り、生まれてはじめてお正月の雪景色を眼にしました。昨年発足した「あらくれ句会」ですが、より楽しく、刺激的な句会にすべくアイデアを練りたいと思います。本年もどうぞよろしくお願いいたします。（中村安伸）

「視る」という雪崩の場所、その行方―ゆん君の写真について

大野円雅

ゆん君の美しい写真を初めて目にしたのは、二〇一一年頃だったか。まだ会ったことのないうちに、知人のサイトにて見かけた。何てこともないはずの被写体が、なぜこんなに強く迫ってくるのだろう。言葉少ななアングルの中に、それら被写体から奇妙な磁力が、はみ出していった。この世界がそんなふうに見えてしまう視線の、強烈な存在感。その視線に鋭く切り取られたシーンは、未だ生きたまま渦巻いているかのようだった。こんな写真は久しぶりか、もしくは初めて見た気がした。

その頃、私は新しい音源を製作中で、レーベルオーナーの提案もあり、ビデオ撮影の出来る人を探していた。先の共通の知人に「あのゆんさんって、映像も撮れますかね？」とメールで聞いたところ、むしろ映像の方が現職に近いことを知り、お願いすることになった。

聞くとゆん君はかなりの酒飲みで、よく路上で寝ていて、撮影については頼まれないと普段全くやらないらしい。私の音源のレーベルでもある七針という場所で、以前他の人の撮影があった時のこと。その頃のゆん君は何と、住む家がなくなっていた。七針社長が「うちに」泊まっていますか？」と気遣ったところ、「いえ、高円寺にいい路上があるんで・・・」と、そのまま帰って（帰る、というのか？）行ったらしい。ホームレスのおじさんにも、友達がいるらしかった。

そんな話を聞いていて、初めて挨拶する日の前、かのように繊細でギラついた、あんな写真を撮る人はどんな人なのだろうと、何となく主張の強そうな人を想像していた。けれど、現れたゆん君は朴訥としてとても控えめで、むしろ内に秘めた雰囲気を持つ青年だった。七針の近く美味しいイタリアンのお店で、ゆん君と社長と私とで、打ち合わせがてら食事をした。人見知りで声がこもりがちのゆん君に、好きだけ飲んでいいですよという、うつむき加減のまま、途端にビールをどんどんあおっていったのを、今でもよく覚えていてる。

二本目のビデオ撮影の時、日本の最東部・千葉県犬吠崎まで品川からレンタカーで撮影しに行った。あれはすでにだいぶ寒くなっていた、十一月ぐらいだったと思う。最東部の岬に立つ、真っ白い敷地の真っ白い展望台を駆け登ると、声も聞き取れないぐらい、強い潮風が吹き荒れていた。そのあとまた少し車を走らせ、風力発電の風車がゆっくりと回る海岸へ、降り立った。砂浜でも寒いのに、ゆん君はおもむろにズボンの裾を巻くり上げ、上もTシャツだけになって、もうすっかり冷たくなっている海に、カメラと一緒にどんどん入って行った。そうして寄せては返し、現れては消えていく波と泡のことを、一心に撮っていた。私と運転手は車まで引き返したが、かなり長い間そこで話しながら待っていた。そのあともゆん君が折に触れ、仕事や旅先で訪れた風景を撮り溜めてくれて、それが「宇宙的郷愁」という曲のビデオになった。

<http://youtube/S62aozm5zM>

被写体である対象のことや、その関係性について、どうしてもずっと考えてしまう。それはとてもしんどく、自分が傷つき磨り減っていくような気がする。それが辛くて、写真を撮ることからは離れてしまった。若い頃は本当に写真のことばかり考えていて、夢の中にまでカメラが出てきて、どうやってこの被写体を撮ろうかと、考えているぐらいだった。以前、ゆん君はそんなことを話してくれた。

写真を撮る、それ以前にただ視ることそれ自体に、すでに傷ついているかのような視点。ゆん君の写真にはいつも、被写体への独特の批評性がある。それは火の粉のかららない高みの見物ではなく、半分は対象とどうしようもなく溶け合い、またもう半分は返え返るように突き放そうとする、そのせめぎ合い。どこまでも正直に視つづける洞察という視点。彼の写真が切り取る一瞬とは、見て感じ入ることと、それを第三者へ伝えることとの境界、そのホワイトアウトの一瞬なのかもしれない。この傷ついた視線は、再び他者（世界）との対峙へ踵を返し、踏み出す。そ

の折り返す足取りのさなかに、ある意味で大阪出身者らしい極端なサード精神も感じるし、ドキュメンタリー番組の制作も手がけるテレビマンとしての責任感も見えて取れる。「折り返し」に横たわる隔たりの存在と、その距離を計ることを、いつも覚悟しているのだろう。際立つて透徹した色彩や空気感を湛えながら、ひどくやるせなかったり、妙に面白過ぎたり、その意思は力強くも生々しく人間くさかったりする。

そんなわけで彼の写真や映像はとてもいい。ふと先日、ゆん君の作品をまとめたサイトを作ろうかと思いつき、彼に電話してすぐ取り掛かった。まだ暫定的で、ゆん君の忙しい合間にデータをもらいに行きながら、追々コンテンツを増やしていくつもり。ぜひ見てほしいです。

<http://yunteshin.tumblr.com/>

追伸…またこの小台マガジンを発行して、BRÜCKEと、八丁堀にある七針とで、共同企画『波、返し縫い』を開催するのですが、その撮影にもゆん君が来てくれます。

■EGUN

長谷川至洋

山岳部だった高校時代を過ぎてから、長く遠ざかっていた山登りを再開してもう4年目になる。思えばこの間、最低でも月に1回はどこかしら山歩きに出かけてきた。

高校時代の山歩きと決定的に違うのは、一人の山歩きをたくさんするようになったことだ。一人で山を歩いていると、ねじれていたりやさぐれていた精神が、ニュートラルになつていくのを感じる。

僕は風のない日、おだやかな陽射しの中を歩くのが好きだ。厳しい冬にもそんな日がたまにある。僕はそんな時に、誰もいない小さな山の頂で、木にもたれて葉が落ちた木々の向こう側を、とりとめのない気持ち

『波、返し縫い』

<http://namikae0320-21.tumblr.com/>

■2015年 3月20日(金)

小台 BRÜCKE <http://cafebrucke.org/>

開場 18時半 / 開演 19時半

前売 2000円 / 当日 2500円

予約 hello@cafebrucke.org

出演 biobiopatata Gecko 斉藤友秋

■2015年 3月21日(土・祝)

八丁堀 七針 <http://www.ftftftf.com/>

開場 18時 / 開演 19時

前売 2000円 / 当日 2500円

予約 yy@ftftftf.com

出演 le trio du yumbo 今井飛鳥 大野円雅

で眺めていたいと思う。それを祈りと呼ぶこともできるのかもしれない。

最近、物語山という山でそんな時間を過ごすことができた。2014年の大晦日のことだ。



■荒川喫茶警々 Vol.5 珈琲エノモト

荒川喫茶警々、第五回目の今回は西浅草にある喫茶エノモトにお邪魔してまいりました。

調理器具の圧倒的な品揃えで有名なかつば橋商店街のすぐ裏手、駒形と人気を二分する「どぜう」の飯田屋さんの真向かいに、この喫茶店は昔ながらの佇まいを残してひっそりと営業しています。

店内に入ってまっさきに気付いたのは、店内のいたるところに飾られた馬の彫刻の数々。馬への愛情をひしひしと感じます。しかも訪れたのは日曜日の昼だったため、もちろんテレビには競走馬の姿。日曜日の浅草でちよつとディープな店に行くと、かなりの確率でレースを見えますよね。何とも下町らしいなあ、と。10名も入れればいっぱいになってしまいそうなお店ですが、なかなか凝った内装（石垣を模したカウンターや鏡張りの壁など）や革張りのソファ、時代を感じさせる木のフロアリングなどを見ると安っぽさというものが全く無く、かなり気合いが入った造りになっていることが分かります。

さて、今回のオーダーはホットコーヒーとハムトーストです。このハムトーストのハムがぶ厚さーそしてマスタードではなく和風辛子が付いてくるのが微笑ましい。

私は頂きませんでしたでしたが、卵サンドなどもかなり食べごたえがありそうでした。

◆オーダー

ホットコーヒー 450円
ハムトースト 500円

◆店舗データ

「珈琲エノモト」
東京都台東区西浅草2-25-11



NIGHTMARE PICTURES

Nightmare Pictures vol.5

竹原春泉齋 絵本百物語のうち「山地々々」

鉄道や自動車ができる以前の旅というものは、現在とは比較にならないほど難儀なものであり、危険も多く伴ったといえます。そういった旅人たちの不安が形象化したものが、この山地々々という化物だったのではないでしょうか。鳥のようであり猿のようでもありながら、かすかに人間の女性らしさを持ったこの不気味な姿は、一度見たら忘られない印象を残します。



山地々々

このものの人の寝息を吸い、あとにて其人の胸をたたき、ひとしく死するとなり。

されども、あいねまの人目をさませば、かへりて命ながしい。

奥州におほく居るよし、いひつたふ。

店での出来事

■ 橋と音楽 vol.7

スッパマイクロパンチョップさんと松崎ナオさんに演奏していただきました。(写真1)

スッパさんの弾き語りは独特で心地よいものでした。音楽はもっと自由であっていいんだということのを再認識させてくれる音楽です。松崎ナオさんはとても気さくで、MC もそんな感じで、新調したピアノで力強く歌っていただきました。

■ 第二回あらくれ句会

今回も参加 10 名という人気の句会です。私は他のお客さんと話したり色々店の用が済んでなかったりでちゃんと参加できなかったのですが、自分なりに少し掴んだ気がするので、次回またチャレンジしたいと思います。

僕は俳句は初心者だし国語の成績もいつも悪かったので、みなさんが句に対して話している中、そのひと文字が大きな違いを生むというようなことが勉強になります。写真(写真2)は11月に行われた第一回のものですが、

■ Au revoir みなさん

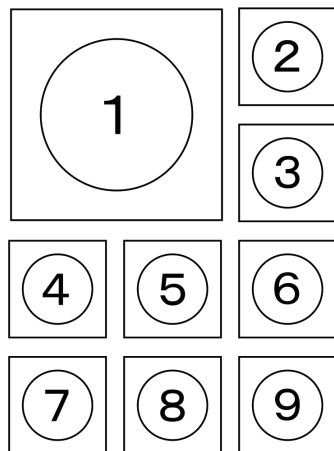
MC ビル風さん(写真3) 滝沢朋恵さん(写真4) 斉藤友秋さん(写真5) 松浦湊さん(写真6) 植野隆司さん(写真7)に演奏していただきました。2014年を締めくくるのにとってもいいライブだったと思います。ビル風さんのラップやトラックはとても希望に満ちていて、滝沢さんはノイズから始まって完全に世界を作っていて、斉藤さんもバツと空気を変えてここちよくて、松浦さんはクチテルミンが思ったより上手くて、植野さんは弾き語りでもやっぱり植野さんで、かっこよかったです。みなさんかっこよかったです。

この日はコーヒーを淹れるのがとても楽しかったです。

■ ケーブル作成 WS

参加者は女性おひとりでした。半田ごてで少し服を焼いてしまうトラブルはありましたが、フォンでもキャノンでも一応作り方は覚えて(?)満足できる内容だったかと思っています。(写真8)

※写真の並び



■ 音響勉強会

機材の起ち上げからスピーカーの位置による音の聞こえ方の違いを参加者のみなさんで確認しました。また、マイキングやマイクを換えて音の違いや、ピアノの録音はどのようなマイキングがいいかなどしてみなさん満足いただけたようです。ギターは狙い方で音のキャラクターが結構違うのがわかり楽しかったです。ヴォーカルはマイクを変えると全然違うのがわかりました。またやりたいです。(写真9)

12月、BRÜCKE ではいろいろな催しがありました。
これからもいろいろな事がある場所にしていきたいと思います。



店主の手記

年が明けました。あっという間に 2015 年です。去年はどんな年でしたか？ そんなことを考えてもしょうがないですね。今年何をするか、それを早めに考えたいと思います。年とか月という単位があると、目標を立てたりするのに便利ですね。去年は二回しか行ってないから今年は定期的にボルダリング行きたい。

さて、昨年店にいらしたみなさま、ありがとうございました。今年もよろしく願いいたします。こんな店知らなかったというみなさま、今年からよろしく願いいたします。店が始まってから 1 年、ようやくオープンくらいな感じで今年もコツコツやってきます。HP ももうちょっと写真載せたり、見やすい感じはどんなだろうとか考えないといけませんが、考えるには時間が足りません。今月中に写真くらいは。

そうそう、ちょっと前からテイクアウト始めました。それで小台橋ブラックって、アメリカーノなんですけど、それを始めました。ドリップはブレンドも。豆売りも公表しようかなと。公表します。イルガチェフェ（エチオピア）、マンデリン（インドネシア）、ポソデカルタス（ブラジル）その他の豆は問い合わせてください。グアテマラとかドミニカとかルワンダとかその時あるもので。どれも 100g 600 円です。焙煎度合いは指定できます。ご注文はできればメールでお願いします。

フランス語会を近々やれそうな気がします。フランス語やりたい方はチェックしてください。

店主

■発行時点で決まっている店の予定

1/18（日）橋と音楽 vol.8 （三輪二郎、ニエリ・エビタ）

1/30（金）第三回 あらくれ句会

2/21（土）橋と音楽 vol.9 （アルフレッドビーチサンダル 滝沢朋恵）

3/20（金）波 返し縫い （biobiopatata Gecko 齊藤友秋）

詳細、最新情報は HP でご確認ください。

<http://cafebrucke.org/event>

小台マガジン vol.5

2015 年 1 月 10 日発行

編集・印刷

BRÜCKE
≈ U